

熱気を帯びる中南米3カ国の再エネ市場 —政府の野心的目標と入札制度のもとで低コストの導入拡大を目指す—

新エネルギー・国際協力支援ユニット
新エネルギーグループ

再生可能エネルギー導入の新たなホットスポットとして、中南米のチリ、メキシコ、アルゼンチンが注目されている。

これら3カ国に共通するのは、政府が野心的な再エネ導入目標を掲げていることだ。チリは2050年までに発電量に占める再エネの割合を、現在の約7倍の70%に引き上げる目標を定めている。また、メキシコは、発電量に占める「クリーンエネルギー」¹の割合を2024年に35%、2035年に40%、2050年に50%と段階的に増やす計画である。出遅れていたアルゼンチンも昨年9月に新法を制定し、電力消費量に占める再エネの割合を2017年までに現在の1.8%から8%、2025年までに20%に引き上げる目標を定めた。

また、いずれの国も、再エネ支援策の中に入札制度を組み込んでいる。エネルギー市場の自由化・開放政策に取り組むメキシコは、今年3月末に民間企業が参加する初の再生可能エネルギー・オークションを実施した。売電契約を獲得した16のプロジェクトの合計発電設備容量は約2.1GW（内訳はソーラーが約1.7GW、風力が約400MW）に上る。アルゼンチンも、今年初めに発足したMauricio Marci大統領率いる新政権のもとでエネルギー改革を進めており、その一環として9月に初の再エネ・オークションを実施する。初回オークションでは、再エネに計1GWの発電設備容量が提供される見通しである²。一方、チリは2014年8月の法改正で政府主導の電力オークションを導入しており、再エネは同じ入札枠の中で他電源と競合している。

オークションでの入札価格が低いことも、これらの市場に特徴的である³。前述のメキシコの第1回再エネ・オークションでは、太陽光（PV）の平均入札価格が4.5セント/kWh、風力が3.94セント/kWhと、世界的水準に照らしても記録的な低い価格となった。アルゼンチンも、今夏に実施されるオークションでこれと同水準の低い入札価格を予想していると思われる。また、チリではすでにPVが国内で最も安価な電力源となっている。昨年10月の電力オークションでは、大規模PVの入札価格は6.5セント~6.8セント/kWh、風力は7.9セント/kWhであったのに対して、石炭火力の入札価格は8.5セント/kWhであった⁴。この

¹ 原子力、炭素回収・貯留付き火力を含む。

² 内訳は、風力が600MW、ソーラー300MW、バイオマス65MW、小水力20MW、バイオガス15MW。

³ 低い発電コストを見込める要因としては、強い日射レベルや豊富な風力資源に恵まれていること、再エネ設備価格が近年大幅に低下していること、政府が再エネのコスト削減に力を入れていること、エネルギー自由化政策等のもとで新たな競争環境が生まれていることなどが挙げられる。

⁴ チリは、政府が出資する戦略ソーラー・プログラム（PES）のもとで、今後10年以内に世界で最も低いソーラーエネルギー均等化発電原価（LCOE）を実現する目標を掲げている。

オークションでは最終的に再エネが全ての売電契約を独占した⁵。

これら 3 カ国は再エネに関しては後発組に属し、法整備の遅れや送電インフラの不備など克服すべき課題も多いが、一方で明確な導入目標の設定、入札制度の実施、発電コストの抑制といった側面では、現在の世界的な潮流を先取りしているとも言える。

お問い合わせ : report@tky.ieej.or.jp

⁵ 計 1,200GWh の電力供給契約の 100%を再エネが獲得した。